# 今なお残る差別――この映画を見て感じて考えてもらいたい

日本固有の人権問題である部落差別（同和問題）。現在も根深く残るこの問題をテーマに、これまでにない視点で描いたドキュメンタリー映画『私のはなし 部落のはなし』（2022年／第96回キネマ旬報ベスト・テン 文化映画第１位）の監督である満若勇咲さんにお話を伺いました。

（インタビュアー：藪本 雅子（やぶもと まさこ）：日本テレビアナウンサー、同報道局記者を経て現在フリーで活動）

**藪本**　『私のはなし 部落のはなし』、２０５分の長尺ですがくぎ付けになりました。その後、この映画を見た知人数人とＺｏｏｍで感想を語り合いました。何だか心がざわざわして、議論したくなるのです。

**満若**　見て話したくなるような気持ちになったのであれば、作った意味があります。制作に６年ぐらいかかっていますが、啓発映画にはしない方針でした。なぜかというと、まず僕自身は活動家ではありません。１人の映像を作る人間として、映画を作る。作るのであれば最低限面白いものを作るのが仕事です。でも、単純に２時間見て、ああ面白かったという映画が本当にいい映画かというとそうじゃないと思っていて、見た後に様々な感情が湧き起こり、心に残る映画が本当にいい映画だという、そんな基準が僕にはあります。

**藪本**　狙いどおりでしたね。

満若　勇咲 さん

芸大において、映画監督の原一男が指導する記録映像コースでドキュメンタリー制作を学ぶ。在学中にドキュメンタリー映画『にくのひと』を制作するも、その後封印。映像制作・技術会社ハイクロスシネマトグラフィに参加後、テレビドキュメンタリーの撮影を担当。2019年からフリーランスとして活動。ドキュメンタリー批評雑誌「f/22」の編集長を務めている。

**満若**　だからといって部落差別を単に面白い映画を作るためのネタとして扱っているわけではありません。ドキュメンタリー映画で人さまに見せる以上は面白くなきゃいけないし、知識のサプリメントみたいな感じじゃ駄目だと思うのです。要するに鉄分が足りないからどうするかという時に、鉄剤を飲めばいいのか、レバニラ炒めを作るのか。どちらでもいいのですけど、ドキュメンタリーは錠剤ではないと言いたいのです。

**藪本**　要するに、啓発映画は錠剤だということですね。

**満若**　ドキュメンタリーは料理なので、ちゃんと味わってほしい。味わった上で鉄分が取れる、そういうことです。鉄分が取れるから、レバニラ炒めじゃなくて錠剤だけでいいでしょ、というわけにはいかない。でも、だからといってレバーの質が悪かったら当然料理はおいしくない。そういった意味で、まずはちゃんとした料理を出すために素材も吟味して作らなきゃいけない。今回は部落差別がテーマなので、映画を見た人がそのスクリーンの向こう側に部落差別の存在を感じ取れるぐらいリアリティーを提供しなきゃいけない。だから逆説的にきちんと部落差別を取り上げる必要がある。

もう一つ、僕は部落差別を社会問題という枠組みだけで捉えたくなかった。つまり単に社会問題として取り上げると、興味のない人にはすごく遠く感じる。つまり料理で言うと、オーガニックだけどちょっと高いものと輸入品で味はそこそこで安いもの、どっちにするかという時に、意識の高い人はオーガニックを選びますが、僕らみたいな庶民はちょっと安い方がいいか、となるわけです。そういう区分けをした瞬間に、届く人は限定されます。啓発映画ならそれでいいかもしれませんが、多くの人に見られる映画でそれはよくないと思います。だから部落差別も単に社会問題というよりはもう少しその問題領域を広げて普遍的なテーマにしたいと考えていました。

**藪本**　部落差別は目には見えづらいし、実態がつかみづらい。映像にするにはかなりハードルが高かったのではないですか。

**満若**　おっしゃるとおり、同和対策事業*1もあったので住環境がよくなりました。差別落書きなどの差別事象もありますが、可視化しづらいといった課題があります。部落差別をどう定義付けして映画として捉えていくか3年ぐらい悩みました。これは思考実験ですが、無人島に人が1人だけなら差別は起きない。そこに何人か人がいるから起きる。人と人との関係性の中で差別が生じる。関係性は見えにくく、カメラを向けても映ってこないものですが、一方でドキュメンタリーは人の関係性を描く

＊1）1969（昭和44）年７月の「同和対策事業特別措置法」の施行から2002（平成14）年３月末の「地域改善対策特定事業に係る国の財政上の特別措置に関する法律」の失効まで、国の法令に基づき行われた、生活環境整備や生活支援、教育支援等の事業。

映像メディアでもある。つまり作っている側と取材対象者との関係や、そこに映っている主人公と誰かとの関係を描くことが基本です。部落差別は、結婚差別などの関係性の中で立ち現れるので、案外ドキュメンタリーという表現手法に合っているのではないかと思いました。取材していく時間が映像に表れて蓄積される。例えばカメラを回し始めた時はちょっとよそよそしい感じの人が徐々に何気ない素顔を見せてくれる。それがドキュメンタリーの醍醐味で、関係性が映っているということなのです。人との関係性に焦点を絞って映画を作ったのは、部落差別を映画化するに当たり、間違っていない取り組み方だったと思っています。

**●部落差別は運動団体の話にあらず**

**藪本**　映画には、特定の地名もいくつか出てきました。了解が取れているからだとは思いますが、少し心配になりました。

**満若**　今回は住人同士の関係性や運動がベースとしてあるところで取材をしたので地名を出すこともできました。一方で地名ばかり注目されますが、映画を作る上で地名を出すことは別にマストではありません。地名を出しても出さなくても映画は作れる。当然このテーマで地域の人々を撮れば会話の中に地名が出てきます。彼らは自分たちのふるさとのことを「うちの部落は」なんて言いません。ですから、地名を紹介しておいた方がスムーズに彼らの話に入っていける、そういう映画を作る上での要請上の問題で地名を出したのです。だから、そういった情報があるから素晴らしいみたいな映画の見られ方をされるのは非常に不本意なことです。出演してくれた人の存在やテーマがちゃんとしていれば映画は成立すると思うので、情報性は重要ではないのです。

**藪本**　今回は差別する側の人も登場していましたが、よく出演してくれましたね。

**満若**　当初から差別する人は撮らなきゃいけないと思っていたので、ずっと探し続けてようやく見つけました。

**藪本**　インターネット上で被差別部落を曝（さら）し、物議を醸している鳥取ループ*2、彼に対しては憤りを覚えますが、映画にも登場していましたね。

**満若**　鳥取ループは普通に取材を申し込んで普通に取材をした。それ以上でもそれ以下でもない。部落に対して彼の持っている目線は、もう何十年前から変わらない部落への眼差しと同じ。決して、彼のオリジナルではない。何かと言うと、運動団体の不正の話を始める。不正は組織の運営の問題、ガバナンスの問題じゃないですか。「同和利権」なんて、差別的な目線の表れの象徴的な言葉だ

＊2）鳥取ループ：インターネット上で被差別部落とされる地名や地図、民間運動団体関係者の個人情報などを掲載したサイト。2022（令和４）年11月には、鳥取ループ代表が投稿した100本以上の動画を、「ヘイトスピーチに関するポリシーに違反する」として、YouTubeを運営するGoogleが削除している。

と思いますが、基本的には部落差別の問題を考える上では本質から外れている。そういう整理の仕方をしないと駄目だと思うのです。だからこの映画はほとんど運動団体のことに触れていません。どんどん部落差別の問題の話からずれてしまう。論点がずれたまま勘違いしているからややこしくなる。要するに運動団体＝部落となっている時点で違うと思う。全ての人が運動をしているわけではない。映画を見た人の感想で、運動団体と主義主張が異なる政党の対立の描き方が甘いというのもありましたが、それは今回の映画の範囲外の話です。まずは、部落差別がなんなのか、きちんと問いを立てるためのものとして、この映画を捉えてもらいたい。今、生きている若者たちがどういう気持ちで部落差別に対して不安感を抱いているかをちゃんとスクリーンの上でリアリティーを持って表現するための２０５分です。

**●日本の歴史と差別意識**

**藪本**　京都の下鴨神社が象徴的に描かれていました。

**満若**　単一の意味を込めているわけではないのですが、部落差別は日本の歴史的な問題でもあるわけじゃないですか。例えばアメリカという国を考えるときに、ネイティブアメリカンや黒人奴隷の歴史を抜きにアメリカを考えられないじゃないですか。それと同レベルで部落差別を考えたほうがいいと思う。そういう歴史的蓄積があるわけで、それを漂白してしまうと日本を考えたことにはならないと思います。

**藪本**　歴史的なものが積み重なって作り上げられた部落差別ですが、解決の道筋はありますか。

**満若**　それは僕に問われても分からない。できることがあるとしたら、部落差別について語ることを避けずに、もっとみんなで語り合うことだと思います。

**藪本**　この映画で伝えたかったことはなんですか。

**満若**　部落差別は、日本を考える上では外せない問題であるということはちゃんと伝えたかった。日本に生きている以上、部落差別と無関係ということはあり得ないし、他の差別の問題にしても、差別をする精神構造は似通っていて、ある種普遍的な人間の姿を描いたつもりでもあります。だから誰もが差別とは無縁ではいられない、だから差別について考える必要がある、そう問いかけるような世界を描きました。それが一部の人の反発を招いた部分でもありました。監督の立場はよく分からないと。でも、映画を見て自分は正しいと思わせるのはプロパガンダ映画です。ドキュメンタリー映画は、見て感じたことを自分で考えることが大事だと思います。

**藪本**　社会をこう変えていきたい、というような思いはないのですか。

**満若**　ドキュメンタリーが社会を変えるのは、全て結果論です。社会を変えようということに捉われると体が動かなくなる。結果的に役立ったらそれはそれでうれしいし、自己承認欲求が満たされるかもしれないですけど、それを目的にはしていない。ただ、部落差別は映画などのテーマにもなり得ると思ってもらいたいかな。このテーマが僕の専売特許になるのは非常によろしくないし、もっとさまざまな人が関わったほうがいい。当事者からも映画を作る人が出てきたらいい。そうすると目線の違うものができるので、そういった多様性は絶対に必要だと思いますね。やはり、知らないことには解決のしようもないじゃないですか。

**藪本**　子どもの頃からこのテーマへの問題意識みたいのはあったのですか。

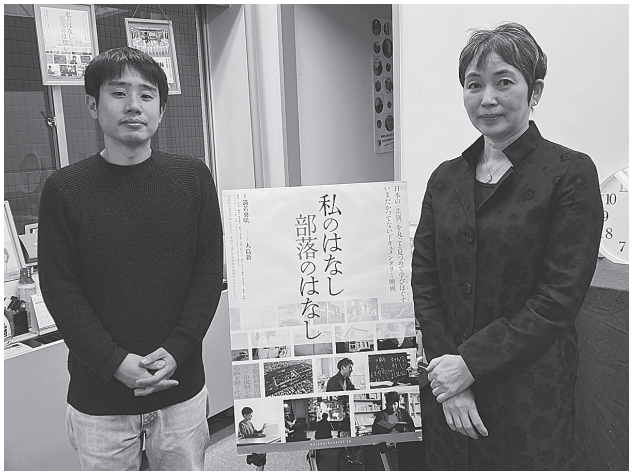
**満若**　ないです。同和教育を受けた記憶はない。部落はありましたが、それを被差別部落と認識してこなかった。当時、日本史の授業でもせいぜい近世の身分制度と、ちょっと水平社やるぐらい。大抵第1次世界大戦で学期末になって時間切れです。たまたま、牛丼屋でバイトしていて、屠畜（とちく）に興味を持った。それ以上でも以下でもない。

**藪本**　今回初めてその歴史を知って、どんな風に感じましたか。

**満若**　時代ごとに被差別部落の境界がその都度引き直されて作られてきた歴史だと思いました。内部じゃなくて外部の問題なのは歴史を見れば明らかです。ただ、部落史だけの観点で見ずに、日本史との絡みで見ないと大事な何かを見落とします。制度的には存在しないのにもかかわらず多くの日本人が抱えている差別意識がどういったものなのか、人間を考える上で非常に興味深いと思いますね。

**藪本**　この映画はどういう人に見てもらいたいですか。

**満若**　特に限定はしません。当事者はちょっときつい部分あるというのは自覚しています。結構、若い人がちゃんと見てくれているという感触はありますね。映画の情報性に引っ張られると映画そのものを楽しめませんが、ぼけっと見た方が逆に伝わる。映画ってそういうものなので、基本的に真剣かつぼけっと見てもらえれば嬉しいですね。




●『私のはなし 部落のはなし』
https://buraku-hanashi.jp/

✽後記　「啓発」は関心のない人には届かない。その通り。志高く社会問題を解決しようと旗を振りかざすと、人は逃げていくのを感じてきました。まずはレバニラ炒めの美味しい作り方を考えましょうか。